

## 別紙 4

報告番 -	※ -	第
----------	--------	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目  
氏 名

青年期の進路選択に関する親のサポートの研究

成田 絵吏

## 論 文 内 容 の 要 旨

**本論文の目的**

青年期における重要な課題として進路選択があり，過去，現在の自分を見つめ，将来の自分を構築していく作業であり，自己に直面することが求められる。進路選択に関する課題は重要なものだけに，一人で悩み，停滞してしまうこともある。しかし，たとえ悩みに直面したとしても，周囲から助言や支えを得ながら悩み，取り組んでいくことが重要である。周囲のサポート源として，青年期において，親はそれ以前の発達段階に続いて重要なサポート源であり，さらに幼いころから日常生活の中で目にしてきた最も身近な職業人であり，青年の進路選択に与える影響は大きいと考えられる。

よって本論文では親のサポートに焦点を当て，青年の進路選択との関連を検討し，青年の進路選択においてどのような役割を担っているのかということをも明らかにすることを全体の目標とし，一連の調査研究を行った。

**第1章 進路選択をめぐる親のサポートに関する研究の概観**

青年期は，進路発達においては，青年期は自分の関心や適性を検討しながら外的な要因も視野に入れつつ現実的にある進路を選択していく時期である。親のサポートと進路関連変数との関連を検討した研究を概観した結果，親のサポートと進路関連変数との間に好ましい関連が明らかにされ(Flores & O'Brien, 2002 ; Leal-Muniz & Constantine, 2005 ; Lent, Brown, Nota, & Soresi, 2003)，特に進路に関する自己効力との関連に着目した研究が多く，親からのサポートは進路選択に関する自己効力という認知的変数を介し，興味や不決断に間接的な関連を示すという示唆が得られている(Restubog, Florentino, & Garcia, 2010)。

同様に知見が得られるのか，基本的知見を蓄積していく必要がある。しかし，国内の研究で進

路選択に関する親のサポートと青年の進路選択との関連を検討した研究は未だ少なく、教育制度や雇用制度、労働市場、文化的風土が異なる我が国において海外とその上で何らかの教育的介入について検討していくことが望まれる。また、サポートの視点から得られてきた知見だけでなく、養育態度など他の要因における研究から得られている親と青年の進路選択に関する知見を参照しながら、広い意味で親のサポートをとらえ、子どもの進路選択との関連を検討する必要性を論じた。

## 第2章 親からの進路選択に関するサポートの横断的研究—中学生、高校生、大学生の各学校段階における比較検討—

親のサポートが進路選択に関する自己効力を介して進路選択に関する行動や態度に好ましい関連を示すことは先行研究より明らかにされてきた。進路に関する課題は、職業人として社会へ出る時間が近づくにつれて、子どもだけでなく親にとっても関心が高まると考えられ、青年期にある生徒や学生が親から進路に関してどの程度サポートを得ているのか横断的調査検討を行った。具体的には東海地方の中学生 382 名、高校生 135 名、大学生 129 名を対象に、Turner, Alliman-Brissett, Lapan, Udipi & Ergun (2003) の「Career-Related Parent Support Scale」を邦訳して用いた進路に関する親のサポート尺度を用いて調査を実施し、進路選択に関する親の実行されたサポートの比較検討を行った。その結果、気持ちの理解、ポジティブな感情の喚起といった情緒的なサポートは、中学生と高校生の方が大学生よりも多くサポートを受けていた。また、親の職業を話すなどの情報的なサポートないしかかわりも、中学生と高校生の方が、大学生よりも多く得ていた。これら横断的研究の結果を踏まえ、各学校段階における親のサポートの質的差異や親子関係を含めて論じた。

## 第3章 高校生の進路選択と親からのサポートとの関連についての研究—進路選択に関する自己効力、進路選択行動との関連の検討との関連の検討—

高校生と大学生において親からの進路選択に関するサポートで差異があることが考えられることから、本章では高校生を対象として調査を行うこととした。高校生の進路選択において、親は物理的な側面だけでなく心理的な面でも重要な存在である。また、親は青年の進路選択を支えるサポート源だけでなく、日常生活の中で幼いころから自然に目にしてきた最も身近な働く大人でもあるため、青年の進路選択に与える影響の大きさがうかがわれる。本調査では親からの進路に関するサポートと進路選択に関する自己効力、進路選択に関する行動との関連を検証した。本研究では東海地方の進学校に在籍する高校生 135 名を対象として、Turner et al.,(2003) の「Career-Related Parent Support Scale」を邦訳して用いた進路に関する親のサポート尺度、「進路選択自己効力尺度」(富永, 2009) , 「進路選択行動尺度」(富永, 2009)を使用した質問紙調査を実施した。その結果、親の励まし、気持ちの理解、期待を示す言葉をかけるといった親のサ

ポートは進路選択に関する自己効力と正の関連が明らかにされ、自己効力という認知的側面に対しては関連を示すが、直接行動には関連は認められなかった。それらの知見をふまえ、高校生における親のサポートが高校生の進路選択における促進要因となる点について論じた。

#### 第4章 大学生の進路選択におけるポートに関する研究—サポート源、サポート内容と進路選択との関連の検討—

大学生は学校から職業への移行の準備が現実的な課題となる。就職活動をめぐりサポート源はいくつか存在する者の、サポート源が有しているサポート内容は異なり、青年は様々相手から内容の異なるサポートを得ていることが先行研究より明らかにされた(下村・木村, 1997)。就職活動自体は、学生にとって心身ともにストレスフルなイベントであり、中には就職活などから精神的健康を害する学生も存在する(労働政策研究・研修機構, 2010)。進路選択を行っていく上で困難な状況に陥った場合、友達や家族といったインフォーマルな人物だけでなく、必要に応じて進路支援室の職員、大学の教員といったフォーマルな人物にもサポートを求めることが有効である。このように、大学生の進路選択においてはサポート源が複数存在することを踏まえ、家族のサポートについて、友人、学校スタッフというサポート源を含めて検討した。具体的には、それら周囲からのサポートと進路選択に対する態度、精神的健康との関連を検討するために、東海地方の大学生 235 名を対象に進路選択に関するサポート希求尺度、「キャリア・レディネス尺度」(坂柳, 1996)、GHQ-12 (新納・森, 2001)を使用し、質問紙調査を実施した。その結果、卒業後の進路に関心の高い者は、進路選択に必要な助言、意見、情報といったサポートを友達や大学スタッフに対してより求めるが、将来展望が低く、進路について計画を立てることが困難な者は、大学のスタッフの情報などのサポートだけでなく、情緒的なサポートも求めていた。さらに、精神的健康が低い者は、大学のスタッフに情緒的なサポートを求めており、大学の進路支援室などにおいて、情報提供等だけではなく時には学生相談部門との連携など、各学生像に応じたサポートを提供することの必要性を論じた。

#### 第5章 進路選択における日常生活の中での親のサポートに関する質的研究—医療系専門学校に進学した学生のインタビュー調査から—

特定の職業人を養成することを目的とした専門学校で進学時に専門職を志すという明確さが入学後の適応において重要な点になる(中野ほか, 2010)。しかし、高校生活を中心とした中で歩く艇の職業を選択するという事は高校生にとって容易なことではない。そこには親のサポートやかかわりがどのようにしてなされていたのか、日常生活の中でどのように職業に関する事が扱われていたのか全体的に検討するために、本調査ではインタビュー調査による質的検討を検討した。協力者は医療系専門学校に進学した学生 9 名であり、彼らに対してインタビュー調査を行い、その結果、親も医療職であること、何気なく日常生活の中で親の仕事や職場に関する話を聞

くこと、親の職場に行く、働く姿を見るなどの経験などから子ども自身が現希望職に興味を持ち、探索を始めたというプロセスを歩んでいた者が多かった。職業を紹介する、専門学校展など職業などを考える機会を提供するという親の意図的、積極的なかかわりは少なかった。意図しない親の間接的なかかわりが、親が従事する職業領域に関する情報の得やすさ、イメージのしやすさなどの形成に影響したことについて論じた。

## 第6章 総合考察

第1章から第5章までの調査の結果を踏まえ、青年期の進路選択における親のサポートについて検討し、青年にとって進路選択という課題について親からのサポートやかかわりの重要性を述べた。本論文で得られた基礎的な知見を踏まえ、今後より広範囲な対象者を元にさらに親の進路に関するサポートについての調査研究を進め、教育的介入に生かすことが求められる。進路に関する親のサポートが大学生よりも中学生、高校生の方が多く得ていること、進路選択に関する親の情緒的なサポートや何気なく行われている日常生活における親の職業について触れることが青年期の進路選択にとって肯定的役割をもつなど調査研究により明らかになった点を考察し、今後の研究の方向性と教育的支援について論じた。